

歴史地理学における都市研究の一課題

——同業者町研究の意義——

藤 木 利 治

一 はしがき

人間の生活様式の一つとして都市をみるときそこには種々の特性が内蔵されているが、歴史都市においては地理的特性の一つとして同業者の地域的集団という地域現象があげられる。

いま私が提起したい都市研究の歴史地理学的課題は、歴史都市の発達と内部構造の究明のために同業者の地域的集団の考察をとりあげてみたいということである。それは都市の成長発達に伴う内部構造の変化に際しての具体例としての同業者町の果した意義についての分析である。従来とも城下町・寺内町などの歴史都市の内部構造については秀れた多くの研究があるが、それはある一時点におけるものが多く、継続した空間的・時間的な変化すなわち地域的・歴史的なものおよび両者の相関的立場からする歴史地理的考察は少ないのではないかと思う。

古くから市場を中心として商人と金融業者が集まり、寺院を中心としては商人・職人・細工人などが集住し、中世には座やギルドに属する同業者が特定の地区に集団占居していたことは周知のことであり、降って近世の城下町においては階級別・職業別に人民が集中したことは著名な現象であった。これらの同業者の集団がいかにして成立し、いかなる

地域に立地し、いかに移動変遷を遂げ、いかなる構造をもち、いかなる機能を果し、いかに社会変動に適應しあるいは背反していったか。また同業者町と都心との関係、同業者町の種類、後背地商圏との関係、市との関係、在方との関係、資本主義経済への移行による変質などいくたの地理学のおよびその隣接科学の領域の問題があるが、これらの同業者町の理解があつてこそよく歴史都市の地理的把握が出来るのではないか。

なお産業革命以後資本主義の發達に伴つて同業者町の内容も変化を遂げ、封建遺制を比較的強く残している手工業者および問屋的商業資本家の同業者の集団と、資本主義機構に組み入つて發展を遂げた近代的高度資本主義的商工業地域とに分化したが、後者にはいわゆる同業者町概念以上に近代的進化をなし、また歴史地理的考察より経済学からする立地論的な考察が必要であつて今回の主旨でもないのでふれない。

また同業者町を形成する母体の都市が小さい場合には、同業者町の研究がすなわち伝統工(隨)業の研究ともなる。ことにわが国の場合には余りにも近代工業化が急激であつたため、その変革によく追隨した先進的部門||近代工業と、脱落した後進的部門||伝統工業を生じた。従つて後者の存在意義は極めて大きく、同業者町の研究に伝統工業の研究理解が必要であり、ことに小都市における同業者町ほどそれがその都市に占める意義が大きいだけに伝統工業の研究それ自身が同業者町の研究となる。しかし今回は都市を中心とするので伝統工業は除外した。

二 本 論

はじめに同業者町の定義であるが、同一職種の業者が町あるいは通りにおいて比較的高率の構成者をなして集住しまた景観としても卓越している地域と解したい。したがつて直観的・感覺的に同業者が多く特色ある地理的景観を顕現している地域といえる。

同業者町の例としては近世城下町のそれと中世の座とがよく知られている。たとえば城下町の如く都市生活における必需品を住民に供給する同業者が集住しその商工業名を町名とした例として、鍛冶町・大工町・桶屋町・畳町・紺屋町・檜物町・銀町・細工町・研屋町・塗師屋町・釜屋町・鞆町・曲師町などの職人町があり、また魚町・米町・茶町・塩町・八百屋町・呉服町・紙屋町・材木町・博労町・旅籠町・両替町・連雀町・車町・櫛屋町などの商人町の名が残っている。なお意義で単に語句の異なる場合は数多くあり鍛冶屋町・細工人町・釜屋町・肴町・穀町・石町・青物町・錦町・綾町・木町・木屋町・宿屋町・連尺町・車屋町などはその一例である。室町時代の座商のそれについては京都では二条町の釜座・米場座、六角町の生魚座、糸座、錦小路町の錦座・小物座、五条の伯楽座、堀川の材木座、大宮の大舎人織手座、西原の酒麴座、その他駕輿丁座・銀座・油座・扇座などがあつた。異色のものとしては地方の城下に農民のみ居住する農人町百姓町があり、京都・奈良の如く社寺の多い宗教都市では社家町・巫女町・僧坊町がある。京都の吉田神社（吉田唯一神道本家）近くには鈴鹿姓を名のる同社の神官の社家町が名ごりを今に残し、上賀茂、下鴨両神社附近にも神官の旧家屋が多く特色ある景観を呈している。これらは一般門前町にみられる門前商店業街とは著しくその趣を異にした同業者集団をなしている。門前町でも宇都宮の曲師町の如く、神棚にささげのお鉢・柄杓等の曲物細工を作る工人が集住する場合もあつた。また封建社会の身分性を示す皮革業者の集団も多く知られている。外国の例としてはアルペール・ドウマンジュオンがユニベルセルにパリーの古い伝統をもつ同業者集団を图示している。

さて従来の地理学における歴史都市の地域分化なり機能分化の歴史地理学的研究は城下町研究のそれにもられる如く、学界の景観地理学的方法に裨さして景観の分析に集中されがちであつたが、同業者の研究においても、こうした方向がとられ、辻田右左男氏が述べられた如く、成立の時期と契機を異にする各種の同業者が同一都市内に近い紺

離を距てて共存し相互の間に文化景観の著しいずれを示し社会不整合面を露呈しているのは、ひとり社会学・経済史学の問題であるばかりでなく、地理学の立場からも注目に値する都市の景相の一つではないか」として、景観論的立場よりする研究が主張され、同質的なものの集団による他との異質的地域の形成による不調和的現象を比較して景観論的に追求することを目的とし、それ以上の分析はかならずしも充分ではなかった。たとえば城下町においても、多くの町について武家住宅地域・軍需工業地域商業地域・普通工業地域・駅伝地域・防衛地域というように、地域区分をなすに留まり、それぞれの城下における意義については、ことに城下の経済的中心である町屋については余りにも解明されていなかった。町屋における地域分化の追求は、その都市全体との統一調和された一有機体を構成する地域要素として発展させる必要がある。ことに近世に入つて都市が軍事的性格から脱却して経済的性格をおびて来た以上は経済活動の核体として町屋地域の比重は増大し、都市自体とそこにある同業者町との地域的経済的關係を無視することは出来ない。ことに中世末からは都市の顕著な発展があり、それが外延的拡大と内包的充実の二面を伴いながらも、前者におけるその拡大に果した同業者町の意義と、後者における内部構造の理解究明のために同業者町の研究が必要である。

またその内的充実による市街の構造形態の決定に当つては強く歴史的伝統が作用している。そこで同業者町の研究には時間的・歴史的考察を無視することが出来ないのであつて、従来のような時期を限つたまたある一現象に限定された分析の外に、都市の発展過程との連関における時間的歴史的・多面的な考察を除外してはならない。市・座・店舗・同業者の集団化といった各時代におけるそれぞれの発達過程はその都市の理解には極めて有用であり、同業者町がそれぞれ前の時代に先行した都市性格を基盤として成立したのであれば、現在のそれは古く中世における地域現

象の残像とみなされる。したがってその地理学的研究にはある時点の断面における分布・立地・形態・機能といった定型的・一面的静態的な同業者町の地理的描出と同時に、何故に卓越した地理的景觀として現在にまで残存したか、すなわち現在という過去のすべての集積された地点における歴史のひとつの地域事象として現代という断面に投影することも必要である。これはとりもなおさず歴史地理学におけるいわゆる歴史地理派と景觀学派の二つの立場である。これは既に藤岡謙二郎氏によって述べられている如く、現在の地域と過去の地域とは無関係でなく、現在・過去相互の理解が必要で、両者の共通項である「地域」と「変遷」を組合せる地域変遷史的方法こそが、歴史都市ならびにその構成要素である同業者町の実態を究明する方法と思われる。

○ ○ ○

同業者町の発生を時代を追ってみるに、同一職種の商工業者が集団化した例は中世の座の発生以前にすでにあつた如く、古代社会では織部・土師部など一定の職業を世襲分掌しながら彼等は一定地に限って居住したと思われ、以後中世に座商人が発生するとともに中世都市により大規模な同業者地区が生まれた。また経済生活社会生活の進展は大社寺の周囲に自然と人民が集住して門前に町を形成しこれが本格的な業者集団の初まりとなつたが、この場合は必ずしも同業者のみではなかつた。

古代社会から封建社会への変革は身分を中心にして人々が集住する傾向となり、商品需要も集中的・大量的となつて同業者の集団成立の基盤を与えた。例えば鎌倉時代京都では六条堀川から室町にかけて源氏一族が集住して一大消費をなし、日用生活品のほかこれら武士の需要に応ずる鑠工が多く居住していたことは吾妻鏡にみえており、鎌倉でも武士の消費のため商工業者が集まりそれが店家、坐売舎を営み、その他の庶民雑戸が武家の外にそれぞれ町を作

り、いわゆる米町、魚町の類があり、材木座という材木町もあった。また室町時代に京都上京の鷹司通りにあった城殿扇子は上京居住の貴族・武士等支配階級の需要を対象に成立し、他方下京の御影堂扇子は一般庶民を対象に発展し、両者はその性格を全く異にしていた。

かくの如く当時の経済活動が貴族、武士あるいは大社寺の需要なり保護のもとに発達を遂げ、彼等を中心に同業者が集住していた。これは当時座として支配層が特定の町の商工業者に対して特定商品の専売権を与えて発達したという上からの恩恵の上に立っていたことを示している。この際、同業区域内の住民すべてがその商品の販売を許される場合と同町内の問屋だけが許される場合とがあったが、前者がより顕著な同業者町を形成することはもちろんである。また交易の場が月数回という市が中心となり、近在の村方の生産物を商人が買うためのものである場合には、一定の街区に一定の品の商いが行われることは好都合で、善光寺の木綿市のごとく市の中心が都心から場末に移行していることは、定着し店舗化することが容易であり、さらに同業者町への進化をも促進させた。

戦国時代から桃山時代にかけては町人の勢力が著しく伸長した時代で、武士が町人の存在を無視して城廓を経営することは出来ず町屋の経営にも注意が払われた。また当時の城廓附近の地名には市場に關したものが多いが、これは古代の市などとは異なり、城下居住の人民に生活必需品を提供する機関で、後の青物市場・魚市場とある種の類似を持っていたのであって、近世の八百屋町・魚町発生の基礎となったのである。ヨーロッパにおいても中世商人社会が城門外に郊外 (Faubourg) を形成してそれが成長して一部同業者町の集団をみた。

近世への移行は中世豪族の立つ基盤が狭くて分断された荘園体制から、広域で集権的に統一された領国体制への移行で、それは必然的に領国の中心としての有機的核心都市を必要とし、ここに城と町が一体となって結合した城下町

が發達した。かくて中世末期から近世初頭にかけて城下町の轉移が生産地域への復帰と、交通の中樞的機能の促進によって行われた。これは城下町の軍事的性格から經濟的意義への移質であつて、商人・職人の地位の向上を自ら招來させた。この城下町の發達とともに領国内に港町・宿場町・門前町が發達して有機的な領国の政治的經濟的封建体制を形成した。しかし初期城下町においては畿内、北陸などの前進地域の如く職種別地域区分が進行している地域もあつたが、土佐等の後進地域では商工の職種的分離が一般的情勢として進行しつつあつたと思われる地域でさえ、同業者の地域的集合の形成は未だ明確に具現化されておらず、同業者が相集住しても同族团的集中であつて純職業的要求に基く同業者の地域集中ではなかつた。しかし当時家臣団においてはその職掌や階級などによつて、一定の制限と条件とが存在しており、町人に対しても当然さうした制約統制が加えられそれが同業者町招來の最も直接的な基盤となつたのである。

わが国の都市成立は極めて古くともその發達は近世に入つてからの政治的・經濟的要因によつたもので、当時城下町の建設が積極的に行われ、従來あつた町屋は徹底的に破壊されたのであるから現在に連なる都市の成立は慶長以後の所産といえる。そこで平安京に基を置く京都の如き例を除いて同業者町の形成も、それ以後の理由、構造を分析せねばならない。しかしながらそれとともに従來述べて來た地理的慣性もそれ以前の要素として見逃せない。

元和以後における封建体制の深化は封建的な身分統制による居住者の場所を制約し同業者町の形成も顕著となつていった。例えば武士団の貧困によつて下級武士の間に内転的な家内工業が發達し、漸次城下町の特産化していったが、彼等は近世初期の城下町成立当初から城下の一劃に集住していたため彼等の職人化はその居住地をやがて同業者町化していった。下級武士でなくとも貧困転落した町人は日傭・人夫・浪人とともに棟割長屋で半共同生活をいと

み、そこにある種の職人が居住して下請賃仕事を行うならば、それがその共同社会の人々に伝播しやがて問屋との間に契約が生れ固定化してしまうことがある。現在の京都の大仏前における扇子下請加工業者や丸龜の塩屋における扇加工業者の零細な賃加工と豊かでない生活水準（後者は現在向上している）はそれを示めている。かくて同業者の集団といつても時代によりその性格の差異を知るのである。

○ ○ ○

同業者町の形成と存続が経済的な力に強く影響されたことはその経済的性格から当然としても、経済外的な影響を受けたことも強かった。例えば偶然とか、支配者の強制とか、当事者の都合とか、何んらかの理由で一度同業者が集団化すると、それがやがて地理的慣性となつてその場所と占居形態を持続させる力が生れ、それが大きな集団となればなる程、抜きがたいものとなり、やがて伝統と化して同業者町を存続させていった。それ以後は伝統なり慣習のままに固定し停滞しやがて衰滅へと向つた同業者町と、外界の変化に適応して固定化とともに進化を続けた同業者町とに分化したが、その多くは前者であつた。それは封建経済の崩壊、産業革命、政治的変革などの統発に対してこの集団内における抵抗要素が余りに多くて順応できなかつたためである。ことにその古いものほど著しいことは論をまたない。こうした地理的慣性も同業者町の存続発展の一つの大きな要素である。

わが国の場合都市自体が共同体としての性格を持たず、二、三の例を除きそこには市民意識の目ばえが認められない。そのような封建社会の中にあつてその集団が経済的なるが故に同業者相互の權益擁護のために、彼等の仲間意識と経済的打算および直接的な生活権から共同行動をとつたのであるろう。しかしそれとも自発的な市民意識なり同業者意識の場合はいく、外的強制による場合が多かつた。ただ京都の場合詳細には明らかでないが、町組との間の関

係を解く必要がある。こうしたことが幾分なりとも同業者町の存続を単なる地理的慣性以外に容易にしたのである。

ことに城下町はその形成自体が政治権力の端的な表現をとった町であるだけに、なによりも領士の政治的意図によることが強く同業者町の成立盛衰が多くそそれに支配されがちであった。ただその規模においては場所的差異はあつてもそれを貫くものは封建支配者の道理である点は各城下町とも共通で、その都市構造は定型的なものであつた。したがつて基本的に類型化できるし、たとえ細かな点においては各封建領主の経済的・政治的政策の差異やあるいは自然的条件などによつて城下の都市構造にそれぞれ特色を現わしてくるとしても、その封建支配者中心の道理を基調とした城下の内部構造なり同業者町であつてみれば共通した要因が定則化出来るのである。例えば信州上田城下町に鍛冶町が形成されたのは真田氏上田築城に際して領内海野郷の鍛冶が御用を勤めた代償として城下の町割に屋敷を与えられ、彼等に強力な独占権を附興したのが起源である。こうした領主と職人との関係の分析によつて、各城下の同業者町成因の一つを規定出来るよう。また江戸の発展が封建社会的規制外からの考察では不十分である如く、京都は朝廷を中心とする貴族・社寺・武士の権力構造を離れては理解されない。彼等の政治力が京都の初期の市街および同業者形成にあつた影響は大きかつた。たとえば中世には社寺は地方における経済的・文化的・社会的優位にあり、広大な荘園からの生産物はここに集まり、緑日に市が立ち、多くの神官僧侶の外に雑仕人・大工・仏師・経師などの工匠が集住して同業者町成立の基礎がすであつた。祇園社ではその近くに社家・宮仕・承仕・田楽・巫女などの関係者が多く集まり、さらに同社の神人が三条および六条に綿座を経営していた如きはその例である。かくて領主・社寺・職人・商人という封建的経済的職業的關係が同業者町成立の一因として定則化出来る。

心に商品の専売権を附与する（高知・京町Ⅱ呉服、岡山・兎島町Ⅱ麴）などの特権を与えて商人を招来するとともに、商人側は商人の頭や職人の司が同業者を率いて大挙移住してその需めに応ずることになり、領主・同業者相互の便宜が一般人民の消費層の利害より先行しているのは封建社会における経済活動の限界をよく示している。経済活動の発展は城下商人の機能を拡大し、また人口のより一層の集中は、特定の町の特権商人に対する商品の専売特権が他の町の経済活動を拘束し、かつ同業者町の停滞となったので、やがてその特権附与は古町とか内町あるいは譜代町などと呼ばれる地域のみに限定されていった。

近世のわが国は経済の資本主義化も、交通機関の発達も未だ不充分であつたにかかわらず、人口の都市集中は不均衡なほどに著しく、当時の江戸は世界一の大都市といわれその商業活動発達の基盤はすでに成熟しつつあつたが、それを育成させる背景が未だ十分でなかつた。ために小さな個々の同業者が集団化することによって大規模な商業交易をまかなつていたと解することが出来る。ことに卸売商の場合は経済的・自然的な条件から地域的に専門化し集中することは京都の室町筋の織物問屋街にその例をみるのである。

なおその機能なり形態の存続については彦根にみられる如く、職人町は永くその生命を持続したが商人町はその職業統制が早く乱れ諸種の店舗が雑居した。それは前者が親方―職人という封建的関係の拘束が強いのに対して後者はこうした経済外的束縛が弱かつたからである。

この様な同業者町の機能はその都市全域を背景とした有機体の中において、換言すれば都市内部の地域構造の一環としてはじめて果し得るのであつて、その内包的地域分化は同時にその都市の進化・発展・衰退の過程のうちに考察せねばならず、ここに同業者町の地理学的研究の立場もある。すなわちその都市の発達過程において同業者の集団が他

の構成要素といかに有機的關係をもつて結合し、都市としての機能の一端を果して来たか。換言すれば都市域における同業者町の果す機能と都市域構成において果す意義の解明に同業者町研究の一つの問題がある。

また一度同業者町が形成されると地理的慣性によってそれが持続され時の経過とともに同種または関連諸産業を招来して繁栄を呼ぶのである。この同業者町自体のもつ性格が相互に因となり果となつてその機能を發揮してきたのである。同業者を構成する商人の場合は比較的大商人が多く一応経済的基礎が確立されていたから同業者間の競争より同業者者の集団によつて得る利の方が大きく、従つてそれはより経済的企業集団であつた。これに対して職人の場合は零細な下請加工業者であるため問屋に対する取引においても、その半共同体的に近い生活において社会的下層のためにも集団化を便としたのであつてそれはより生活共同体的集団化であつた。

○ ○ ○

その立地は古い地域には酒屋とか質屋の居宅が多く、都市の發達とともに周辺部に借屋が増加しここに小百姓・浮浪者・小商人が多く住み、京都でも扇子加工の零細職人は問屋よりも都心から離れた鴨東の南辺に、織物業者は西北部の西陣であるが問屋は都心部の室町通を南北に立地していた。彼等職人が社会の下層部であるため市衛部から排除され、波紋が拡大する如く周辺部に押しやられたのであろう。箕輪城下では主通りである連雀町、田町に商人町が、職人町その他は裏通りにあつた。かくて一般に商人町は表通りにあり、職人町が町家のはずれか裏町にあることは周知のことで、それは経済的、社会的地位の低さからであつた。しかし武具等をつくる鉄砲町の如き職人町は例外的で城に近く集住したが、桶屋・大工・紺屋・櫓物町などは裏町にあつた。すなわち軍需品生産職人は城廓に近く、消費財生産職人は遠く位置していたのである。このほか紺屋町・白銀町・材木町・塩町・穀町などはその職能から川筋の舟

輯の便のある地に限定されたり、あるいは城下の外漕や河川の分流域が利用されその附近に位置した。魚町は地下水や臭気の制約を受けて裏町や城下の外側に多く、京都では地下湧水に恵まれた錦小路に集中し、京籠巻五の魚屋の図には店頭の魚に湧水がかけられている状態が描かれている。以前中世にはここに染殿があつたがそれもこの湧水に依存していたのであろう。博労町は町を通過する街道のはずれにあり、京都の「室町の博労」として有名であつた馬市も五条室町にあり下京（南部）の發達が著しくなかつた当時ではそれは町の西南部で當つた。名古屋では熱田の神戸町以南の海岸部にあつたかつての魚座が後の熱田魚市場の濫觴であり、また呉服・小間物・古着などの店は本町筋に多かつた。旅籠屋は交通路に規制されることは当然で、京都の三条大橋周辺は東海道の終点として多くが集中している。同じく京都の高瀬川沿いには樵木町・木屋町があり同河川を船で運ぶ薪炭商が軒を連ねていた。京都祇園社には堀川神人と神する材木商人仲間の材木座があり、彼等は大鋸板を座人以外に売ることを禁じ堀川の河面十二カ所を独占して貯木所とし、古屋の処分権まで持つていた。堀川は古米丹波・江州の材木を集めたところで平安奠都以来の材木街区であり、近世にも多く存在し京中材木町といわれた十五丁の過半が堀川沿いにあることが京町鑑に記されている。また北野神社に属する北野神人の酒麴座は当社に近い西京に居住するならわしであつた。朝廷に奉仕することによって強力であつた禁裡駕興丁座の如きも御所の西辺に集住した。かくの如く朝廷や社寺の位置によって座の分布が決定され、それが以後踏襲されて同業者町が固定化していった。

以上の如く領主の政策・自然的条件・交通関係・支配層との結びつきなど種々なる同業者集團の位置決定の要因を見出すのであるが、京都の場合は先ず朝廷・貴族・社寺（これが城下町と異なる点）・武家の支配層と結び彼等の居住地に規定されて上京（北部）に發生し立地した。後には商品經濟の浸透發達に伴い一般庶民層を対象として下京

が発生し、中世末以後市街地は上京下京の双核的發展を遂げた。その間度々の戦火災害を受けたがその度毎に壊滅前の地に再生し、応仁の乱以後はその復興が町人の手によって行われ、その都度貴族・武士の手から行政権が漸次町人に移り、つとに町組の組織は町人を編制し彼等によって都市的生命が維持されていった。近世における貨幣經濟の普及・町人經濟力の強大、大阪の發達による京阪間の交通増大などによる京都の發展の外に、全国的交通系からみた下京の地理的位置の良好によって都心は従来の政治的中心の上京から、經濟的・交通的中心の下京に移行し、室町通りに沿って南北に伸びた織物問屋同業者町がその都心の移動に伴って南下したのはその顕著な例である。この變動はともなおさず京都市街の發展過程であつて、市域が政治の中樞地とともに移動したもので、それに伴って同業者町も立地移動したのである。

こうした京都の例にみられるように都市自体の發達膨張による同業者町の立地移動も一つの課題として挙げられる。したがつて各職種が受ける個々の自然的・經濟的社会的諸条件とともに、都市自体の変遷との関連において同業者町を理解することがその構造把握の一つの視点となる。

○ ○ ○

同業者町研究のもう一つの課題はその發展過程を歴史的に把握する際の定則化であつて、G. TaylorとP. Lavedanが行つた都市の輪廻の如く、同業者町について、それぞれが同様に考察されてしかるべきであり、そうすることによつて歴史都市の把握を容易にすることが出来よう。いま仮りにその發展段階を次の如く規定したい。

幼年期（發生期）

同業者の集団化が始まる。

青年期（絶対数増加期）

同業者の増大が著しくその集団化が特色ある景観となる。

壮年期（相対数最多期）

ある同業者数とその地域における店舗数の最大を占め、顕著な景観として何人の眼にも映じ同業者町が完成する。

老年期（絶対数減少期）

同業者の移転・廃業などによって同業者数が減少していく。

右のような概念を具体例について考察し、それぞれの期間・特色・人口との関係・位置などについて追求さるべき問題がある。

三、結 び

以上同業者町について具体例を挙げつつ現存の歴史都市研究における同業者町の意義研究の立場方法および課題について述べてきたが、要するに封建時代を経てきた歴史都市の研究にはその封建社会として必然的存在であり構成要素であると考えられる同業者町の研究が必要である。そしてこうした同業者町の研究が必要である。そしてこうした同業者町の歴史地理学研究は歴史都市の「職業に現われた地域性」の問題であり、「都市内部の地域分化」の問題であって、明らかに地理学の一課題なのである。そしてその主たる要因は経済活動であって、当時のその分析によって復原された景観をもとにしてその時代の人文的自然条件との関係を考察せねばならない。この際地理学において対象となる同業者は具体的に有機体としての都市の一部あるいは大部を構成するものとしてのそれぞれであり、またそれが何らかの形に於いて現代都市の内部構造の基調となっているものでなければならぬ。

参考文献

辻田右左男 同業者町の地理的考察 ——京都市を例として—— 内田寛一先生還暦記念地理学論之集下

藤岡謙二郎 先史地域及び都市域の研究

豊田 武 日本の封建都市

小野 均 近世城下町の研究

藤岡謙二郎 城下町の地理的研究の課題

谷岡 武雄 室町織物問屋街の地理的研究 —— とくに分布論的にみた家業 —— 立命館大学人文科学研究所紀

要五 “家業”

上原 徳 城下町移転の地理学的研究 大塚地理学会論文集第五輯

松本 豊寿 初期城下町の歴史地理学的研究

豊田 武 中世日本商業史の研究

藤田 元春 平安京変遷史

小桑田 亮 旧城下町景観 地理論叢第七輯

地方史研究協議会 日本の町 ——その歴史の構造——

原田 伴彦 封制確立期の都市 ——領主権力と町民武装との関係—— 立命館文学第一一七号

Dickinson, R. E.: Civiregion and regionalism Taylor, G.: Urban Geography

拙稿 京都市の発展と同業者町について ——扇子業同業者町からみた—— 立命館文学第一四九号

拙稿 室町織物問屋同業者町の立地および店舗構造 立命館大学人文科学研究所紀要五 “家業”

拙稿 京都における同業者町の発達 ——畿内の歴史地理学研究(近刊)(一九五八・一〇)